

はじめに

本稿は、高度情報化社会における、やきものの意義を探ることを目的としている。やきものとは、土あるいは「陶」としての材質感と、つくり手独自の手法でそれを読み換え、かたちに変容させる「芸」という技術である。そこでつくり手が、土の材質感を読み換え、かたちを作り出す過程に着目し、考察をした。

第一章 土の材質感による表現様式

先史時代より、つくり手は土から、意識的にせよ無意識的にせよ、大きな啓示を受けてきた。それらは、様式としての縄文式と弥生式、表現としての自然感と装飾性、器物としての実用性と造形性という概念を産み、多種多様なやきものを生み出すこととなった。当時、独創性という概念はなく、やきものは伝統の技術と意匠に基づいて制作され、熟練の技、精巧な技巧という技術的側面にのみ価値が求められた。そのため、巧緻な技術を尊重する風潮が時代変遷と共に強くなり、特に江戸末期から顕著となったのである。

第二章 技巧主義からの脱却

江戸時代末期からの技巧主義に対し、近代以降、民藝運動は機能へ、前衛陶芸は造形へ、やきものを徹底することにより克服した。民藝運動は、かつての無名のつくり手たちのおおらかな美に満ちた仕事にその典型を見出し、自身の仕事において実践した。これに対し、前衛陶芸は実用的な機能を全く顧慮しない純然たるやきものを生み出したのである。両者は多くの面で異質であり、融和しがたい相対立する極点を示している。しかし、共通して、土への肉迫の底から、確かな材質感を読み取り、独自の視覚性を持ったかたちとして提示したのである。

それは単に新たなやきものの形式を生みだしたばかりではなく、新しいやきものの美と思想の発見でもあった。民藝運動は、技巧主義に立脚した意識の内に、病的な墮落の危険を鋭く感知し、前衛陶芸は、個々の想像力の純粋な発現を求め

て、自立的な造形の世界へ踏み込んだのである。

第三章 現代言語による土の材質感の読み換え

機能か造形かという二極化した仕事に、統合的な仕事を対置することによってバランスをとり、現代の美意識と強靱な伝統とを作品において、分かちがたく融合させた楠部彌弐と里中英人を取り上げ調査研究した。

楠部彌弐は近代的な芸術の概念に基づき、現代の作家として、徹底して自己の創意によって作品を作り上げようとした。「鎌倉や桃山期のものが、いかにうまくできても、それは模倣であり、これに対して、あくまで近代を感じさせるものを作りたい」と、その理想を端的に表明している。そして、常に材質感と創造性という相対立する二つの原理を、どちらかに片付けることはせず、何らかの形で結びつけ均衡を保っていた。

一方、里中英人は、土のプロセスに着目し、材質感や、実在性など、土そのものを問題にしたり、焼成するという行為を凝縮的に考えるとといった思考をかたちにした。やきものにとって最もありがたいとされてきた偶然性や火の神秘性を否定し、伝統の分解と融合を通じて、土と火の関係を深く考察し、土を焼くという事柄を再確認し続けたのである。

楠部彌弐、里中英人の両者は、土の力を知っていたがゆえに、頼りすぎる危険性も知っていた。知りすぎていたがゆえに、やきものを他力本願の世界から、素材の他力に基づいた自力本願の領域に導いたのである。しかし、その他力本願と自力本願とは決して別個のものではなかった。ゆえに、時として日本の伝統的なやきものとは異質の作域を示しながら、決して表面的な効果だけをねらった仕事に終わらず、常に堂々とした堅牢な骨格を備えているのである。素朴な感情と鋭い観察力をもって土や火の自然を凝視しながら、他方、透徹された知性によって、自らの原体験と時代言語の双方から、現

代におけるやきものの意義が探求されていた。

第四章 土と火の造形の身元証明

1960年代以降、やきものにおいて色彩や装飾がより積極的な要素となり、多彩な効果を生み出すことになる。フォルムも抽象的な造形や構成だけにとどまらず、自然物や既製品の形体が自由に引用され再現されている。このような傾向は、特に1980年代以降、土に対するつくり手の態度に変化をもたらすこととなる。つくり手は主に表現形式や構想を問題とし、土はその実現のための素材にまで退行したのである。伝統や因襲とは無縁な風土から生まれたやきものは、囚われのない大胆な意欲に溢れる一方で、創造の過程における土とつくり手との精神的・体験的な結びつきとは切り離されている。イメージによって観衆に訴えかけるアイコン的な刺激の強度のみが求められ、視覚的にも触覚的にも、それを土と感じさせる性格や必然性を備えていないのである。

しかし、やきものの原点はやはり土にある。今一度その原点に立ち返り、自覚された土の材質感をベースとした上で、土を突き放し、表現の可能性とやきものの構造を問う。このことこそが、土と火の造形が現代における表現の論理となるための一つの必要条件なのである。

第五章 高度情報化社会における工芸の可能性

高度情報化社会に向かう時代の中にあつては、機械であれ、手であれ、ものをつくること自体が相対化されつつある。現代の造形を支えているものは、いわゆるCAD/CAMにかかる不可視のデジタル空間であり、仮想空間で考えられた、現実世界でのものではなくなりつつある。二次元的な写真やグラフィックだけでなく、三次元的な椅子、机、自動車、建築まで、身の回りの様々なものが容易に複製される世界では、感覚は取るに足らない戯事、理解不能な未知、もしくは前近代の因習を伝播するだけのものとして一



fragile
500×620×550(mm) 陶
2012年

蹴され、人は現実に触れ、直視し、感じ、多様性や多義性を見抜く術を失ったか忘れてしまったようである。

しかし、情報は人間の精神的次元（こと性）を強化する一方で、その対極の物質的次元の存在を指し示し始めてもいる。情報化社会においては、機械に見合う合理性を意識せざるを得ず、意識的かつ、計算可能なものとして事物を構想する傾向を帯びるのに対し、やきものは、無意識的なものや、それを宿す肉体の面影、そして両者の連動という計算不可能なものを、物質を介して形態の上にもたらず可能性を豊かにはらむ。たとえば茶碗がそうであるように、やきものは特定の行為によって用いられ、特定の行為を惹起するもの、つまり、ことへの傾きを蔵するものである。つまり、ものとの関わりがプロセスという、こと性をはらんでいるのである。

この点に留意するならば、やきものは

こと性へと傾斜する情報社会へのあり方として、自らの新たな存在理由を見出すことが出来るに違いない。今こそ、やきものは、時代に即して、様々に複合、変容してきたあり方を省み、材質感と肉体との関わりという系を新しい時代のもの性にいかに結びつけるかを問わなければならない。

まとめ

やきものは土を単に熱処理し、他の材質に変えたものではない。また、自然感や独創性を追求すること自体が問題なのでもない。つくり手が現代の文脈において、統合的な視点から土の材質感を読み換えることこそが重要である。材質感と肉体の関わりという系に目を向けることは、時代に背を向けることではない。受け継がれてきた伝統をより普遍的な視点で考察し、発見したものを現代の感覚において取り入れる。新しい創造の

営みによってこそ、伝統は新たに生まれ変わり、時代と共に生き続け、活動に活力を与えうるのである。時代に即応しながら、材質感とつくり手の密な関わりを事物にもたらすことで、現に進行しつつある新たな時代を批判的に迎え入れる。このことこそが陶による造形の意義であるとの結論に至った。



fragile
250×400×320(mm) 陶
2012年